

生涯学習情報誌

Life Learning

11

2016
Nov.
NO.315



締切
迫る!

2016(平成28)年度

博士号

取得支援事業

財団法人生涯学習開発財団は、「人間は感動する心を失わず、何ごとかを学び続ける限り、年齢にとらわれない生き方をすることができる」という理念のもと1983年に設立されました。

平均寿命が延びる今、定年後も学習を継続し、社会へ貢献し続ける中高年の存在は、日本社会にとって大きな支えとなります。

財団では、現在博士号の取得を目指す50歳以上の方々を対象に、2011年度から支援事業を行っています。この取り組みを通して、来るべき高齢化社会の生涯学習を促進し、よりよい社会作りに貢献することをめざしています。

本事業は、国籍や性別を問わず、また、研究領域は文系・理系を問いません。独創的で社会的な意義のある研究を行い、博士論文を執筆中あるいは提出が予定されているすべての方に門戸は開かれています。皆様からの積極的なご応募をお待ちしております。

■ 採用予定人数

特に人数は定めません。

■ 助成金の支給

- ・支給金額は一人あたり年間50万円
- ・支給期間は1年
- ・支給日は2017年3月

■ 応募資格

以下の条件を満たす者

- ・50歳以上（性別、国籍、所属を問わない）
- ・日本国内に在住している者
- ・博士課程（博士後期課程を含む）に在籍するか、論文博士号の取得をめざし、かつ実行性の高い研究計画書を作成した者、もしくは博士論文の一部をすでに作成した者

・日本国内の大学で博士号を取得する予定の者

・日本語で論文を作成する者

・品行方正、勉強に熱意を持っている者

■ 応募方法

（1）提出書類

- ・指定申請書
- ・身元証明書
- ・研究計画書
- ・推薦書 ほか

詳細は募集要項でご確認ください

（2）応募締切日

2016年12月15日（木）必着

■ 選考

提出書類および面接により選考

お問合せと募集要項の請求は下記まで



一般財団法人生涯学習開発財団 博士号取得支援事業部
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-21 新虎ノ門実業会館2階 TEL 03-3508-4551
募集要項・申請書は <http://www.gllc.or.jp> E-mail hakushi@gllc.or.jp



(上右) 御蔵島桑水輪床脚小箱 (2010年)
 (上中) 御蔵島桑提印箱 (2009年)
 (上左) 御蔵島桑提印箱「遊」 (2016年)
 (左下) 父・征成作煙草入 (1937年頃作 ※床脚部破損あり)

木工芸 (江戸指物)

島崎敏宏

Shimazaki Toshihiro

1949年 東京都荒川区に生まれる
 1964年 父・征成につき江戸指物の技術修得に入る
 1970年 東京デザイナー学院工芸・工業デザイン科卒業
 1971年 伝統工芸新作展 初入選
 1972年 伝統工芸木竹展 初入選
 1975年 日本伝統工芸展 初入選
 ('91年文化庁買い上げ、'06年宮内庁買い上げ)
 1984年 東京銀座・和光にて「くらしの木竹展」(以降出展多数)
 2003年 東京国立博物館「孔方図鑑所銭箱」修理
 2006～2009年 伊勢神宮第62回式年遷宮に用いる玉箱等本地制作
 2010年 MOA美術館「21世紀の伝統工芸—世界の眼—」出展
 現在 日本伝統工芸会正会員



聞き手: 上野由美子 (左)

古代オリエントガラス研究家。UCL (ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン) 考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加(1999年～2002年)。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切子装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

金釘を使わず、木の部材を組み合わせることで家具や箱物を作る指物。組手、継手、仕口といった接合部が技術の主体だが、完成品からはこうした部分は見えず、外から見えない所ほど、技術の粋が詰まっているとされる。京指物や大阪唐木指物が公家御用達や茶道用に発達したのに対して、江戸指物は武家や商人に愛され、美しい木目の桑材と、それを活かす技術が発達した。

——指物の技術はいつ頃から始まったのですか。
 平安時代と言われていて、当時は大工仕事の一部でした。指物師が登場するのは室町時代で、公家や武家の簞笥、机などの調度品が増え、茶の湯の発達で箱物需要が増え、指物師の仕事として確立されていきました。

徳川幕府によって多くの指物職人が京や大坂からやってきました。武士・町人文化の江戸では、京指物などの上品な色塗りよりも木目の素朴な雰囲気好まれ、江戸指物のスタイルができていきます。大名や力をつけた財閥のお抱え職人もいたようです。

——御蔵島産の桑が作品に多く使われていますが。

桑以外にも、櫻、桐、杉など木目がきれいな木は使いますが、良いものを作るときは御蔵島の島桑を使います。御蔵島には樹齢何百年という良質な材が残っているのです。桑は一般の木材店では売ってなくて、親しい銘木店に入った時に買ってストックしておきます。といっても、使うまでに最低でも15年、20年と寝かして天然乾燥させます。常にストックしておけば、いつでも良い作品づくりに取り掛かれるという、父・征成の教えです。

御蔵島の桑は、渋くて、粘りがあって、使ってるうちに品格が出てきます。黄色っぽい色が40年、50年経過すると、私は「博物館色」と言っているのですが、きれいな茶色になります。最初からこの色が欲しいという人もいて困るのですが（笑）。

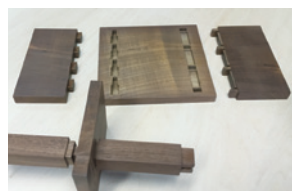
——制作工程のポイントを教えてください。

まずは木取りで、木目や木のクセを見ながら、板材のどこからどの部材を取るかを決めていきます。作品の仕上がりを大きく左右する作業です。

次に必要な部材を切り出し、平面と直角を正確に出しながら、鉋で整えていきます。そして、部材の接合部になる、ホゾ（凸）とホゾ穴（凹）を削り出していきます。木を煮て曲げて曲線を出す技術も使っています。面と面を45度にカットし接合する、留め加工も必要です。どれも正確な技術がないとできませんが、一朝一夕にできるものではありません。

部材が揃い、ホゾ加工が済んだら組み立てます。仮組みをしながら、ホゾの加減を0・0何mmレベルで修正していきます。納得のいくまで何度もやります。引き出しがスムーズに動きつつピタッと収まる加減も難しく、組み立ての時に調整していきます。

仕上げは、漆を塗って研いでを繰り返します。それによってこの光沢が出るのです。



ホゾ加工の見本を見せていただく。



小さな仕事には小さな道具を自作。



御蔵桑六花卉食籠
(2003年)



古彩木画箱
(2004年)



神代彩線木画箱
(1990年)



神代杉提箱
(2007年)



桑拭漆提抽斗箱
(2001年)

——技術はお父様から学んだのですか。

学ばというより、家内制手工業でやらざるを得なかった感じですね。明治期に指物の第一人者として活躍し、天皇陛下への献上品も作った前田文之助が三宅島出身で、それに続けと多くの三宅島出身者が東京に出て、指物師を目指したのです。父もその一人で、先に指物師になっていた兄の下で修業しました。兄弟でやっているとしても長兄の方に注目が集まりがちで、このままでは自分は日の目を見ないと思った父は、公募展に挑戦するようになったそうです。

私も父の影響で、若い頃から芸展に出してきました。ただ、公募展で入賞する作品と自分が作りたい作品が違うのも事実で、悩ましい点でもあります。選ぶ側は芸術性や創作性が高い作品を選びたいわけですが、私は技術があつての芸術・創作だと思っているので、自信を持って出した作品が選に漏れてがっかりしたこともあります。もちろん同じ作品を高く評価してくれる方もいますので、価値観の違いでしょう。

——文化財の修理などもよく任されていますね。

ありがたいですね。伝統を踏まえつつ、いま作ったものが最高なんだという気持ちで取り組んでいます。また、そこから学ぶこともあります。東京国立博物館から依頼された古銭箱の修理では、寄木細工風の技術を説明し、それをヒントに新たな作品も作りました。

私自身も変わってきている部分はあります。父と一緒にやっていたときは、父が伝統的な作風のを、私が創作的なものを作る傾向にありましたが、父が亡くなったからは、先人の残してくれた技術や島桑を、自分がしっかり受け継いで、次世代にも伝えなくてはと思うようになりました。なかなか弟子を取るまではいきませんが、応援している方が、今回の日本伝統工芸展で新人賞をとり、励みになりました。

祝

2015年11月 京都大学博士号(理学)取得

滝澤 寛さん(取得時54歳)

【論文テーマ】 δ 型黒点の生成発展過程とフレア等のエネルギー解放現象の関連性

お金にはならないけど、よくここまでたどりついたと自分を誉めたい

■少年時代の興味が再びムクムクと

子供のころに連れて行かれたプラネタリウムで、皆既日食の存在を知ったのが、太陽に興味を抱いた最初だった。実際の皆既日食を初めて見たのは38歳、1999年のフランス。2001年にはジンバブエまで行き、快晴の空に、周囲のプロミネンスまでクリアな見事な皆既日食を見られた。父が亡くなったのも重なり、日食を見て感動している自分に感動したのも新鮮な驚きだった。いつか復学して太陽を研究したいと考えていた滝澤寛さんは、2003年に神戸大学に編入学した。

天文学でも太陽研究者は、実は少数派。研究発表に対する世間やマスコミの受けはいいが、隣接する産業は少なく、なかなか食べていけないという事情もある。母や姉からは、「40過ぎて大学生に戻るなんて、お前は何を考えているんだ」と、親子の縁を切るくらいの勢いで非難された。

■目視による粘り強い黒点画像観察から新説

修士課程の2年目に、京都大学附属天文台の台長・黒河宏企教授を訪ね、押しかけ同様に指導を仰いだ。博士後期課程は京都大学大学院に移籍し、主に衛星から太陽黒点を撮影したSOHO画像を目視で分析し、新たな仮説を立てた。

「太陽の表面下に磁束管という磁石の性質を持ったチューブがあって、何かの拍子に浮き上がってくる。その磁束管の断面が黒点として見えている、と考えられています。 δ 型黒点^{デルタ}というのは最も発達した黒点で、黒点のS極N極が隣接し、大規模なフレア

ア爆発を引き起こすことが多いのです。私は、この内、SNSNの四重極構造の黒点に注目しました。このタイプの黒点は磁束管のチューブがねじれて、太陽面の下でつながっているのではないかと。黒点自身の回転や黒点間の位置の変化などを動画で調べた結果、12個の候補のうち11個が、磁束管が下向きにねじれたこぶの浮上と判定できました」

太陽黒点の活動は11年周期とされている。磁束管のねじれに注目した研究は過去にもあったが、11年周期の全期間に渡って黒点のねじれの様子を詳しく研究したのは滝澤さんが初めて。粘り強い観察がもたらした成果だった。

■一歩踏み出すと誰かが手を差し伸べてくれる

理解ある先生や大学に恵まれたのも大きい。神戸大学は、「太陽専門でやりたい」と言う私を京大に



太陽の活動が地球の気候変動や電波障害などに大きく影響するのは間違いないが、まだ未解明のことが多いという。

里子に出してくれた。京大では文科省のGCOEPプログラムに恵まれ、教育・研究アシスタントとして雇用され、毎月給与が支給された。だから続けられたこともある。研究が進んで結果が出てくると、母や姉も応援してくれるようになった。

「放送大学の講師もしていた黒河先生を手伝った際、世の中には多くの学び直す人がいることを知りました。財団でも、理事長とともに張先生から強く励まされ、勇気づけられました。時間は若手の倍以上かかり苦しいこともありましたが、できることを地道にやっているうちに、いつの間にかたどり着いたという思いです。中年男がよくやったと、自分を誉めてあげたい。一歩踏み出すことが大事で、そうすると誰かが手を差し伸べてくれるはずですよ」

■科学は薄皮を剥がすように進歩するもの

2015年の春から横浜の高校で教師として勤め、16年4月からは神奈川工科大学でも非常勤講師として教鞭をとる。研究継続は、いつでも自由にはいれないが、週末や夏休みなどを利用して、次の論文に取り組みたいとのこと。

「大学では、昔より真面目に勉強する学生が増えています。経済的理由で進学や研究を諦めるケースが目立ってきています。また、今年ノーベル生理学・医学賞を受賞した大隅良典先生も、基礎研究を軽視する政策に警鐘を鳴らしているように、基礎研究に短期的な結果を求めるのは逆効果ではと感じます。基礎研究は無駄の積み重ね。薄皮を剥がすように進歩するものです」とも。